
暇な世界にさようなら

歯ぐき血まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な世界にさようなら

【Nコード】

N7753Y

【作者名】

歯ぐき血まみれ

【あらすじ】

あー、最近することないよなー学校行っても授業とかまじつまんねえし。この世界は暇すぎる。ゆいいつの楽しみといえど家でするオンラインネットゲームくらいだよまったく。はあ、いつそのこと別の世界に神様が送り出してくれないかなあ。若干キャラがチート性能だったりするのでチート性能とかまじありえないわーとか思う人には向いてないかもです。作者はまだ未熟者ですので誤字脱字や変な点などがありましたら指摘してくれると嬉しいです。

オレの日常（前書き）

最初はらへんは主人公の日常回

オレの日常

「あーさむい。なんかなんねーかなマジで？」

隣でオレの友人がそんなことをいう

「なんとかできたらしてるって・・・」

実際なんとかしてほしいよなこの寒さ

いま携帯の天気予報的には5℃らしい

コイツがさむがるのも無理はない。

「そーいやさーもうすぐテストだよなマジで」

そーいやそんなこともあったな

まあ知ったところで勉強なんかするわけがないが

「俺全然勉強してないからこんどやべーかも的な？」

へえ、こいつ意外に勉強するタイプなのか。

こいつは守山達也 オレこと凜道 蛍の同級生。去年高校に入学した時に前の席にいたのがコイツだ。

その時からコイツとはつるんでるからもう1年くらいの付き合いになるのか

「じゃー早く帰って勉強したほうがいいんじゃないのか？」

とりあえずテストが近いならオレとだらだらしゃべってる時間なんてないはずだし

そう思ってオレはそう提案する。

「そうだなあー、んじゃ帰るわ。また明日なー」

よし、オレも早く家に帰って暖房の聞いた暖かい部屋でネットゲでもするか。

そういうながら特に急ぐまでもなくだらだらと家に帰る蜚であった。

「さむっ」

自分の家についてまず最初に口から洩れた言葉がそんなものだった。

いやだって4℃だよ？外より寒いっておかしくね？

オレは制服を適当にハンガーにかけて暖房を入れつつPCの電源を入れる。

ちなみにここはもうわかってると思うがオレの家である。

母親は毎日深夜に帰ってくるか仕事が遅過ぎて仕事場で寝泊まりするしあんま家にいないのが現状だ

親父はいない。事情はしらん。

まあそこらへんは母さんが話してくれる時をまとうとは思う

別に知りたいわけでもないしな

そんなことを考えてる間に室温もそこそあがって暖かくなってきている。

さて、と。

そろそろINするか。

そう思いつつオレはインターネットをつけてオレがはまっているネットゲームーセカンドワールドを起動する。

スタート画面。

そして始まりの街

このセカンドワールドは3Dのアクション系だ。

いろいろな職業があり、レベルアップによってもらえるポイントをいろんなステータスにふって自分専用のキャラクターをつくれる。

ちなみにオレのキャラ名はホタリンである。

昔言われてたあだ名を使ってみた。

もつとマシな名前にしろよって？

ほっとけ

さーていつものメンバーはいないかなあ

そう思い街をぶらぶら歩いてたら後ろから人影が近ずいてくる

「やあ」

そして挨拶の声。

振り向く。

白いニット帽 服も同じく白系で統一されたディスプレイズ そして金髪

間違いない

「よう、マカロニさん。他のみんなは？」

この友だちの名前はマカロニ

日常的に狩りや素材集めを共にする信用できる仲間である。(キリッ

それにマカロニさんの物理範囲攻撃ははんばない。

ザコモンスターの軍隊なら一撃で壊滅させられる

一部では一騎当千のマカロニとかいわれてるらしい

「まだ着てないみたいだね」

さわやかな笑顔でそう返事される

「んじゃ適当にクエストボードでもみとこうぜ」

「そうだね」

そんな会話をしていたら

「もおあんたたち着てたの？早いわね」

そんな声が聞こえてくる。

ちらっ

全身黒い龍騎士が着るような鎧に身をつつみ、頭にはティアラのようなものをのせている。

そして金髪のポニーテール

「なんだコロネか」

「なんだって何よ！」

ちなみにこいつが着てる装備 集めるの大変だったなあ

というかわざわざ装備を確認なんかしなくても声でわかるんだけどね

こいつはコロネ。

コロネもオレのギルドメンバーの一人で職業はアサシン。相手の急所を突いて即死させたり相手から素材を盗んだりするのが主な戦闘スタイルだ。

てゆうーか、普通に強い。

「んで、あんたたちなにしてたのよ」

「ああ、暇だから何か適当にクエストでもいこうかなってね」

「なるほどね」

2人が会話してる間オレはクエストボードに注目していた。

このクエストボードといわれる板からは様々なクエストを受けることができる。

まあようはどこにいくか決めるところみたいな？

「うーん、素材集めはめんどくさいから討伐系にしてくんね？」

「そうだねえ・・・おっと」

マカロニさんが何かにきずいたようだ。

オレもマカロニさんが見ている方向をみる。

そこにはよく知ったヤツラがいた

「お、アルスとりサじゃん」

「そうみたいだね」

「お、こんにちわー。ちょうどいまどこいこうか迷ってたところだったんだぜ」

「よ!」

「――――」

元氣な挨拶を返してくれたのはリサ

なにかと綺麗な聖騎士装備に身をつつみ、背中には長くも短くもない剣を二本収納している

本人いわくかなりのレアアイテムでちよーかるいよ!とのこと

みずいろの髪をツインテールに結んであり、かなり幼く見える

そして何もいわず腕を振ってあいさつしたのがアルス。

いわずもかな超無口である。

だがしかし彼の防御力は理解不能なレベルまで達している。

全身西洋の鎧を装備しており、外見からどんな人間なのかあまりわからない

っていうか全く分からない

頭装備も鎧なので顔もわからないという謎極まりないヤツだ

一部の間ではびくともしない絶対的な防御力から世界の境界線《アースライン》とか呼ばれてるらしい

なんとも大層な二つ名だが大袈裟な表現にはならないところがまたすごい

ってか怖いよ

さて、これでそろったなギルドメンバー

「ところでどっかいきたいところ——・・・」

「ねえ知ってる？」

オレが言い終わる前にリサが乱入

「この前突然北の森の奥地に空まで続く塔が出現したらしいよ！」

なんだそれ、おもしろそうだな

「え、ほんと？ おもしろそうね」

「そうだね、それでその情報はどこから？」

マカロニさんの質問にたいし

「私の友だちが森で見かけたらしいー ほら、写真！」

と答える。

なるほど、証拠付きってワケか。ならもう決まりだな

「んじゃ、その塔ってやつにいこうぜ」

というオレの提案に

「そうだね」

とマカロニさんと

「わかったわ」

ころねが返事し

「――――。」

アルスが無言の同意

「おっけー！じゃー私が案内するよ！」

そうして、とりあえずオレたちは好奇心とかそんなもんで塔に向かった。

でも今にして思えばなんで不思議に思わなかったのだろうか
アップデートの報告もなしに出現した塔のことを。

オレの日常（後書き）

誤字脱字や感想など報告してくれるとありがたいです。

終わる日常（前書き）

今回は戦闘かいてみましたー的な

終わる日常

「ん、気がついたようね」

目を開ける

「なんだコロネか」

「なんだってなによ!」

ベシッ

「んで、ここはどこなんだ?」

「知らないわよ!」

ベシッ

あれ?

おかしい。

自分の服をみる。

魔法使いが着るようなベタなローブ

手のひらを握り、開く

オレはP C画面で激しい戦闘を楽しんでいたはずである

なのになんだ

この、自分そのものがゲームにはいつちやったよ的な展開

「っていうか、ここ、ゲームの中なのか？それにしても見たことない土地だが」

周りを見渡す。森である。

北の森に見えなくはないが周りに生えている木の種類が全く違う

「だから知らないわよ！」

べしっ！

「さっきからいてえよ！なんで事あるごとに叩いてんだよオイ！」

「まったくどうなってるのよ……」

華麗にスルーが決まる

だがたしかに異常事態だ。

とりあえずその木に腰掛けながら意識が飛ぶ前のことを思い出す

☆☆☆

あのとオレら五人は北の森にあるタワーへと足を運んだ。

北の森はそこまで敵も強くなく、ほぼ無傷で進むことができた

そして塔が見え、息を吸い込み、深呼吸して中に入った

あ、まだ説明してなかったな。オレは職業魔法使い

別に何かに特化してるわけじゃない。

全ての魔法を万弁なく最強レベルまで強化している。

オールマイティってことかな？

だが何回も言うように特化してるわけじゃない

結界魔法の防御力がそこそこ強いレベルだが防御特化型のアルスと比べたら余裕で負ける

それにオレたちのPTはそれなりに廃人スベックな気もする

このゲーム内では名が結構知れ渡っている

ような気もしなくもないような気がす…

「モンスターがいないわね……」

と、ここでコロネの発言に思考と中断させられた

「かえって不気味だよね」

コロネの問いにマカロニさんが笑顔で答える

……絶対不気味がってないだろ

まあたしかにおかしいな

「おぼけとかでたりしてー」

と、リサがいたずらをする子供のような表情でいう

「そ、そそそそそ、そんなのいるわけないじゃない!」

「コロネ、お前もしかして怖いのか?」

あまりのわかりやすさについて意地悪をしたくなつたのでした

「ち、ちがうし!こわくないし!っていうか速く歩きなさいよ!ばか!」

「ははは、大丈夫だよ ほら、もうすぐ頂上です」

そんな会話をしながら進んでいるといつのまにか頂上らしき場所にてた

正面に巨大な扉がある

うわー、あやしー

「なんかかいてあるよー!」

リサがはしって扉に書いてある文字を読む……

「うーん……漢字難しいな……とりあえず、てい！」

と、文字を読むのを1文字目で放棄し、扉を押す

「ってオイ！だめだろ！ていうかなにがとりあえずだよ！」

オレは我を忘れて思わず突っ込んでしまった

のだが

「うわ、眩しい！」

扉の開いた先から今日烈な輝きが放たれて、オレのツツコミはスル
ーされた。

☆☆☆

輝きがだんだん薄くなり、光の中に誰かが立っているのが確認できる

そして光がきえ、中の部屋に入る。

そしてみわたす。うわっ、ひろ。

なんていうか……昔の神殿みたいな作りで若干暗いけど別に困るほどでもない

そして一番奥にまた扉

その扉の前に立つ一人の老人

NPCか？

「お主ら、新しい世界へ、行ってみたくはないか？」

……え？

目の前のNPCと思われるヤツがそんなことをいった

オレは振り向いてマカロニさんに尋ねる

「どういうことだ？」

「新しい世界……新しいダンジョンでも追加されたとかじゃない？」

「なるほど、ありえるわね」

「よくわかんないけど、いこう！」

ほんとテキトーだなーおい

まあ新しいダンジョンか……悪くない 悪くないぜ！

オレは老人に振りかえり

「おう！行かせてくれ！」そう叫んだ

「ほう、おもしろい。ならばコイツをたおしたら連れて行ってやる。

」

老人の目の前に超巨大な魔法陣が展開される

そしてそこからでてきたのは……

体長20メートルは余裕である前足の浮いている二本だちの漆黒の龍

……20メートル!?

でっか

なるほど……こいつを討伐すればいいのか

龍と対峙する。

オレと龍の距離10メートル。

まずは様子見だな

「ゆけ!」

老人がそう叫んだ。

龍の口になにやら炎のようなものが見え隠れしている。

……ブレスか!

その瞬間、龍の口からとてつもない勢いで炎が噴射される。

とりあえず、様子見として炎体制の着いた結界を一瞬にして2重に
はり、その結界に防御力上昇の補助魔法をかける

こんだけ硬くすればビームくらいよゆう……

って

は？

おかしい

オレの結界は1枚でロケットミサイルは防ぎきるくらいの強度があるはず

なのに

一瞬にして結界が消えうせオレに直撃……

するかと思ったその瞬間

アルスがオレとブレスの間に回り込み彼の持つ盾で防ぐ

炸裂音

そして爆風

さすがアルスだ。オレの結界をも消しとばす威力をもろともせず
受け止めやがった！

アルスがこちらに腕を突き出して親指を突き出している

攻撃はまかせろー。そういつてるように見える

つつかなにあの余裕。

「盗賊スキル 影分身！」

うしろで技名コール

コロネの得意技影分身。コロネが次々と分身して10人ほどに分裂。そしてそれぞれがさまざまな方向に散らばり、クナイや巨大な手裏剣などをかまえ……一斉攻撃！

空中から、真正面から、左右からクナイや手裏剣などが集中的に浴びせられる

だがそのどれもが鱗にはじかれ傷一つ付けられていない

「うそでしょ……！」

「うおりゃあああああ」

リサが両剣を構え

龍の攻撃をよけて……

足に向かって猛烈な連続攻撃を放つ

剣が視覚では認知できない速さで動いているのか剣がかすんで見える。

龍の意識がリサに向けられた瞬間

「いでよ！魔剣ハルバード！」

「攻撃上昇スキル発動！」

ゴオオオオオオオとマカロニさんを待とうオーラの濃さが跳ね上がっている

マカロニさんの腕に巨大なハルバード

2メートルちょいあるあの剣は単体攻撃専用で、魔力を注ぐことで攻撃力が跳ね上がる

続いて技名コール「インパクトストライク！」

インパクトストライク。通常攻撃の10倍だっけ？とりあえずそこはかとなく強い打撃攻撃のほうである。それに攻撃上昇スキルつかってるからきつと軽く尻餅くらい着くんじゃないかあの龍？

巨大なハルバードを高々と振りかぶり

龍の頭めがけて……

激突

そして二度目の炸裂音

だが今回はマカロニさんの攻撃によるものだ

そして続いて爆風

龍が衝撃に耐えきれず前足を着く

龍が立っていた場所を中心に放射線状に地面にヒビがはしり、小規模なクレータを作る

砂煙が舞い、マカロニさんが飛び下がり、コロネもリサも戻ってくる

砂煙が張れ……そこに現れた龍の頭の鱗にヒビが入っていた。

グギユウウウウウウウウ

龍がぶちぎれたとばかりの咆哮を吐きだす

なるほど、つまりあのヒビが入っている場所がいま一番もろい

そこを集中攻撃すれば……

「マカロニさん！リサ！」

「そうだね」

「おっけい！」

どうやらアイコンタクトで理解できたらしい。

しびれを切らしたように龍がものすごい速さで突進してきた

「重力魔法グラビトン！」

オレの重力魔法グラビトンは相手にかかる重力を増やし、動きを制限するというものだ

龍は攻撃主がホタリンだときずくと、固まった姿勢のままブレスを
はく

すかさずアルスが盾で防ぐ

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「範囲攻撃上昇スキル発動！」

これでマカロニ含むトリサの攻撃力が飛躍的に上昇

ついでリサの攻撃

「双剣使スキル 百烈斬！」

やく5秒間で100ちよつとの斬撃を放ち龍の頭部に命中する

よし、頭部の鱗がもうほとんどついてないうえに血が滴っている

いける！

そしてマカロニさんがハルバードを肩に担ぎ

「ジャツジメント……」

マカロニさんが技名をしゃべりながらジャンプし……

もはや鱗がはがれ血まみれの龍の頭へ

「インパクト！」

大爆発にもいた衝撃がオレの身体を虫ケラのようにふきとばす

砂煙が張れ、そこにいたのは

ハルバードを振りおろした後のようなマカロニさんと　そこに立つ龍

静寂。

スウッと龍の頭から縦にラインがはしり

全身から血を吹き出しながら無数のポリゴン状となって消えていった……。

「よっしゃあああ！」

「やったわ！」

「イエーーーーー！」

「あはは、かっちゃったね」

「――――。」

いやー一時は死ぬかと思ったぜ

オレは皆とハイタッチしているところで、さっきの老人がきた

「なるほど……うむ、よろしい。ではむこうにある門をくぐるがいい。」

オレたちは門をくぐりぬけた。

中の部屋はさっきの部屋のように広くなく、そこらへんの学校の教室よりちよつとせまいくらいの広さ

その部屋の中心の空中に停滞し、なおもゆらめきながら輝く光

転送ゲートみたいだな

このセカンドワールドというゲームには転生ゲートというものがあり、

街の中央やダンジョンのボス部屋の後などにあり、街に戻ることができるうえ、他の街にも行けるといふ

非常に便利なしろものである

でもこの転生ゲートの輝きかたハンパナーな

まぶしいって

「最初の輝きはこれね」

コロネがいう。なるほど

そしてオレ達5人は順番に光の中へと飛び込んで行った

そしてそこで意識が途切れる

回想終了

☆☆☆

「あーなるほど、老人の言ってた新しい世界って別世界のことか？」

コロネに問う。

「やっぱりそうなるよね……」

「もう意味わかんないわよ！」

「まあ落ち着けてオイ」

ベシッ

「いやだから痛いって！」

「とりあえずはやく仲間と合流しなきゃ……」

そういうわけで、適当に森をさまようホタリンとコロネであった。

終わる日常（後書き）

誤字脱字訂正しました

私達の初日（前書き）

とりあえずこの2人から始めます

私達の初日

「あー、なんか迷ったっぽいな。オレら」

となりでのんきなことをいつてるバカはホタリン

赤髪で全体的に長く、前髪は左右に分けているが右目が隠れて見えない

最初はチャライ印象を受けたがそうでもない

まあ、どーでもいいけど。

っていうかのんきすぎるでしょ！

「もおー疲れたわよ…。なんとかしなさい」

「できたらしてるって」

はあ…

ほんとほこイツ面白がってない？

「そういえばさあ」

「なによもう」

どうせロクでもないことだろうと私は思った

「腹、へっつてない？」

あー、そういえば私昼飯抜いたんだっけ

「まあ、それなりに……」

「なんかさー、この森結構深いと思うんだよ。食料調達とかしたほうがよくね？」

うわー。

なんかすごい軽いノリみたいな雰囲気であと数日かかんじゃねみたいなこといつて……。

でも、それもそうだ。

もしかしたらそれくらいかかるかもしれない

「そうね……。どこかに食べ物……」

周りをきよろきよろしながら歩いていると草村からイノシシのようなモンスターがでてきた

なんか、気持ち悪い……

皮膚の色が紫なところがまた……これは無理ね

絶対まずそ……

「おお、うまそうなヤツ！」

え？

「え、まさかあんたアレ食べるつもり!？」

「おう ファイヤー!」

イノシシもどきが炎に包まれて

……灰と化した。

……。

「やべ火力しくった。」

「なにやってんのよ!」

ホタリンの頭を殴る

ベシッ

「ちょ、いてえって。なに? もはや癖にでもなってる?」

となりで何か言ってる気がするけど無視する

はあーもう、次出たら私がしとめよう

そんなことを思っていると2回目のエンカウント

「お、発見!」

さっきの失敗など忘れたかのようなホタリンのテンションに半ばあきれつつ

「こんどは私がやるから」

獲物にクナイを投げる

今回もイノシシのようなヤツで、おそらく頭が弱点だろう。そう思
って額を狙う。

額に吸い込まれるようにクナイが突き刺さり ドビュシャ！という
少々むごたらしい音と血しぶきがとびちり、その場に倒れる

「うおー、こえー」

べしっ

「とりあえず、なんかもう暗いからそこらへんで寝ようぜ」

ふと空を見上げる

みあげた空はいつのまにかそろそろ夜を迎えようとしている。

すこし開けた場所に移動するホタリン

「ここらへんでいいか。」

と、いいながらさっきのイノシシを木の枝を器用に組み立てて火あ
ぶりにしながらいう

準備はやっ！

そして落ち着きすぎでしょ！

え？何？実際森で迷ったことでもあんの？

昔からだけどホタリンはマイペースすぎると思う。

「お、うまそうじゃね？塩がほしいよなー。……うお、うめえ！」

とか思考を巡らせているとホタリンがそういつつ肉をほおぼるホタリン

私も食べる

「お……おいしい。」

「だろ？オレ才能あるかもしれない」

丸焼きに才能もなにもないと思うんだけど……

「てゆーかさー、オレら本当に別世界ってやつに来たのかな」

食事中にホタリンが独り言のように呟く

「わからないわよ。でも、それが一番納得できるわ」

「オレさー、実は楽しいんだ」

え？

「いやほら、むこうじゃ学校でも友達あんまりいないし、勉強もめんどくさいし、毎日帰り道にあー別世界とかいきたいなーとか思ってたさー」

なんか、意外だった。

ホタリンの性格上むこうでもエンジョイしてそうな感じだったけど

「まあオレとしては一日の楽しみがネットゲームをしてる時くらいだったんだよ。でも今はちがうだろ？こっちには親友がいるし、戦えるし、だから、今もお前といれて楽しいぜ」

なんか恥ずかしいな：

べ、別に嬉しいとか思っていないわよ？

「どうした？ほっぺが赤いぜ？」

「も、もとからよ！」

がしっ

「痛いっ！」

でも、それは私も似たようなものかな

わたしことコロネは中学生のころ仲間外れにされて自室に引きこもる毎日を送っていた。

毎日毎日のように自室にこもり続け、ネットゲームでひたすら敵軍を薙ぎ払い続けた。

ずっと単独狩りをしていて、レベルもプレイヤースキルも上達し、スキルも強くなっていき、まるで廃人プレイヤーのようだった。

っていうか廃人だったな私。

そんなぼっちプレイを続けていたある日、私にPT勧誘の声がかかった。

それがほたりんだった。

当時のイベントでボスが強いと聞いたが、おそらくそれだろう

私もソロでは倒せなかったのでPTすることにしたのだが、その日から毎日が楽しくなっていったのである。

「おい、どーしたばーつとして。熱でもあんのか？」

と、一人昔の記憶を懐かしんでいたら突然そんな声とともに額に手がのびてくる

「ばかっ ないわよ」

伸びてくる手を払いのける

「ああ、なら別にいいんだけどさ」

そう話してるうちにだんだん意識が睡魔に支配されてくる

「あー、そろそろ眠くなってきたな」

「そうね」

「んじゃ、寝るわ。オヤスミ……」

そういう彼は上半身を木に預けた姿勢で寝てしまった。

私も寝るかな……

普通なら知らない森で布団もないのに寝るなんてできるものではない
かったが

この時ばかりは心地よく眠ることができた。

☆☆☆

「神様、本当によろしいのですか？あのもの達で」

「いいんじゃないよ。おぬしも映像は見たであろう？」

「ええ」

「あの龍はむこうの世界でS級に属するドラゴンじゃ。つまりトツ
プクラス。大丈夫、彼らならきつとやってくれるじやろ」

「だと、いいんですけど……」

はじまりの街（前書き）

最近、やわらかい歯ブラシ買いました。

はじまりの街

翌日、オレらはまた歩き出す。

「ねえ、あとどれくらいかかるとおもう？」

「さあー」

んなときかれたってねえ……

「まっすぐ歩いとけば……って、おお！」

なんか人が通るような道を発見した。

これ、街とつながってるって感じがするぜ

「これ、もしかして街までつながってたりする？」

隣にいるコロネも同じことを考えたようだ。

「そうじゃね？とりあえずこの道をまっすぐ進もう」

「……そうね」

よーし、順調順調。

「今がだいたい朝9時くらいだからー……」

「なんでわかんnoよ」

「オレの勘！」

「……はあ」

なんだそのあからさまにがっかりした顔は

オレの勘は結構当たるぞ？

「まあ、昼時には街に着いたほうがよくね？　メシくいたいし」

「でもお金とかはどうするの？」

あー、そうか。すっかりわすれてたぜ

「どーすっかなあ……」

金がないと飯食えないじゃん……

などと悲しんでいたらコロネが

「あれ？あれって人じゃない？」

よく見ると20人くらいの男の人達があるいている

オレ達は歩いて近づいていくことにした

ことにしたのだが……

どうやら山賊の方たちだったらしい

「動くな！」

「はいはいもーわかったからうつせーな」

「ナメてんのかゴルア！」

短気なヤツは苦手なんだよなオレ・・・

「野郎共！」

「お、おやびん！」

山賊の輪の中に2メートルはありそうな大男が入ってきた

「お前らしいもんもってそうだな。荷物を置いてけ。そしたら命は助ける」

「私達荷物なんてもってないわよ？」

「あ？ゴルア口答えしてんじゃねえゴルア早く出せゴルア！」

子分みたいなヤツが叫ぶ

そこでオレはあることに気付いた。

なんだ、メシくらい食う金 手に入るんじゃない？ってね☆

「あのさー、聴きたいんだけど」

対象はもちろん子分。重力を3倍くらいにする

続いて……

「雷魔法サンダー！」

範囲はもちろんさっきと同じく子分たちに設定する。重力魔法で身動きが取れなくなったところで電撃魔法を浴びせてしびれさす。これで子分共はかたずいた。

「きゃ！」

短い悲鳴が聞こえる

「へっ！ 調子こいてんじゃねえよ兄ちゃん！」

いつのまにか親分がコロネの後側から抱きつく。

「動いたら命はねえぜ！」

あー。

あいつ、死んだな。

コロネは潔癖症らしく、知らない人とかに触られるのをひどく嫌う

「殺ス」

うわ切れた

「…!？」

気がついたときにはコロネはおやびんの背後に回り込んでいた

だがもう遅い

バタッ

倒れる

一瞬だなあ……。

……死んでなきやいいけど。

「なんか、ごめんな」

「え？ なにが？」

「んまあ、いいや。なんか探してくれ。一応山賊なんだからなんかもってるだろ」

「なるほどね」

そう思い一人一人のポケットやら袋をのぞかせてもらう

「あーいいのもってねえなコイツら」

「そうね……あ、ねえ、この袋なんかどお？」

そういうコロネは一人の山賊の腰についていた腰巾着をオレの渡す
じゃら♪ という効果音になる

これはまさか……

「開けてみよう！」

「そうね。金貨とか入ってたらわざわざ売りに行かなくてもいいし
ね」

中身は予想通り数枚の金属でできたコインだった。

「よしじゃあ昼までに街にいこうぜ！」

「そうね」

と、その時今まで感電して気を失ってた子分の一人が気がついたらしい

ついでにいろいろ聞いておくか。

「おい」

「は、はいななななんでしょうか！」

「街ってどこ？」

「むむむこの方向にああ歩いて半日く、くら、くらいですすす…
…っていかおやびん！」

親分にかけより

「うそだろ……おやびんが負けるなんて……」

そう呟き気絶った

あの人結構強かったのかな？

……瞬殺だったけどね

にしてもすごい早業だった。コロネだけは敵に回さないようにしよう。

「なによ……」

「いやなんでも？とりあえずあっちに歩いて半日ってことは走れば余裕だな」

そう思ってオレは自分の重力魔法グラビトンを応用して重力操作を発動し自分にかかる重力を軽くする

そして風魔法ですばやさをあげる。

重力魔法は結構使い勝手がいい。オレの得意技みたいなものかな？

コロネはなにもスキルを唱えない。まあこいつは素でめっちゃ早いしな。

「じゃ、出発すつかあー」

「ちゃんと付いてきなさいよ」

そうして2人はものっそいスピードで森の小道を走るのであった。

☆☆☆

半日つつたからそれなりにかかると思ったがどうやら誤算だったようだ

30分でついた。

「さあーて、ついたついた」

そこには超巨大な門があり、周りは高さ30メートルほどの塀にかこまれていて勝手に入れない

そしてその門の左右に兵士の格好をしてランスと盾を装備した2人のいかにもな格好をした門番が待ち構えていた。

「すみません、中に入りたいんですけどー」

コロネの問いに対し

「見ない顔だな……まあいい、通れ。」

いいのかよ！

見ない顔っていったのにあんがいあっさりいってしまった。

門をくぐると……

「うわ、広！」

という言葉が口から洩れた。

しばらくぼーっとする

「とりあえず、店……めんどくさいから適当なところで買うか」

「まず宿じゃでしょ？ 昼ごはんも付いてそうだし」

おお、それいいかも！ ついでに寝る場所も確保できんじゃない

とりあえず宿を探すことになった。

☆☆☆

「すみません。宿ってこれ1枚で何日くらい休めますー？」

宿屋っぽい雰囲気のものなりに豪華そうな建物のカウンターにいる
おばちゃんにオレは尋ねる

「銅だったら1枚で1泊だね」

腰にかけてある腰巾着をみる

さっき数えてみたら銀が2枚で銅が2枚あったところからするとこ
の宿でだいたい22日分らしい

22日か……十分だな

「全額で22日分らしいぜコロネー。どうする？もうここに住んじやう？」

「何言ってるのよバカ。仲間探しはどうするのよ！」

「んー、じゃあ一応ここ拠点に動こうぜ。この街結構広いし、いろいろそろってるだろ」

「それならまー…。」

「じゃおぼちゃん、とりあえず1週間くらい貸してくれ」

そういったあといろいろ部屋についての説明を受けた

「あいよ。105号室があんたらの部屋だ。荷物とかおいてきな」

鍵をわたされる。

階段を上がり……おお、あったあったここがオレらの拠点か

玄関を開け、短い廊下を進みリビングっぽいところにはいる。

リビング広いな。

縦横5メートルってところか

「へえ、結構いい感じの部屋ねここ」

コロネに同感だ。

日当たりも良く、窓から気持ちいい日差しが入ってくる。部屋の中にテーブルがあり、ベッドが4つほどついている。なんでベッドが4つも？と思ったがご家族づれとかのためにでも用意してあるんだろう。と一人で納得する。

ちなみに風呂とトイレもばっちりである。トイレが和式の水洗トイレだったことに胸をなでおろす。

洋式はなんかおちつかんのである。

ふう。

一息つく

「めしだな。」

おばちゃんいわくもうすぐ昼飯が届くとのこと。

メニュー表を渡されたが、「おまかせで！」という返事をしたのでなにがくるかわからない。でもこういうのって何が来るかわからないからワクワクするワケで

「失礼します。」

玄関をノックされたあとそんな声が届く

「うお、きた！ どうぞ」

なんかテンションがあがるのである。

返事後、メイドさんが入ってきて、皿などを持ってきてテーブルに並べてくれる。

「では、失礼します」

運ばれてきた料理は……

黒木和牛を思い出させる分厚いステーキにサラダっぽいのが添えられてある。

うおーうまそう。

一方コロネのほうにはサカナのフライのようなものが並べられており、白ご飯、味噌汁のようなものなどが並んでいる。

和食かあ

「さて、いただきます」

「いただきます」

うまい！昨日くったイノシシのあれとか比べ物にならんくらい上手い！

「おいしい……」

コロネもそう呟く。

しばらく無言で食べ物を口に運び続けながらコロネがこんなことを

言い出した

「みんな大丈夫かなあ……」

「それもそうだな……。でもまあ大丈夫だと思うぜ？強さ的に」

オレ達がもともとしていたセカンドワールドというネットゲームはファンタジーな世界で剣や魔法を使って冒険するといったアクション系RPGなのである。

そしてレベル上げについてだがそれが相当マゾ仕様となっていて、レベルは最高100らしいけど69から70にするときは本気で頑張って30時間かかった。流石に死ぬかと思った。

まあ、いまのところセカンドワールドで一番レベルが高い人が92だそうだ。まあ、レベル80以上なんて数えるほどしかないんじゃない？

たしかプレイ人数が5万人とかだったはずである。そこそこ人気ゲーなんだな。

それにオレはレベル75　コロネはたしかレベル73とかいったつけ

つまり結構すごいのである。

リサはもうちょっとでレベル65とかはしゃいでたな。マカロニさんは75。オレと一緒にである。

アルスはまだ知らない。結構長い付き合いなのだがまあともかくい

ろんなところが不明なヤツなのだ。憶測だがオレより5くらい上なんじゃないかと思う。

それにレベルとは別にスキルレベルというものがあり、たとえばマカロニさんが使うストライクインパクトはレベル83。使えば使うほどレベルが上がっていく感じである。

そしてオレらPTはそれなりに有名だ。アルスに関しては知らないもののほうが少ないんじゃないだろうか。

なんせほぼすべてのステータスポイントを防御にふっており、HPもありえないレベルまであるらしく、どんなに強いボス戦でもHPが7割を下回ったことはないらしい。さすが世界^{アース}の境界線^{ライン}。

つまるところ、オレ達全員上級者なので戦闘能力的な意味では心配ないだろう。

「強さ的に・・・ねえ。まあみんな問題なく強いのは知ってるけど、私はリサが心配なのよ」

あーなるほど。それには同感だ。

なんたってあいつは幼い。

最初あったとき小学生かと思ったけど一応中学生らしい

変なおじさんとかに誘拐とかされないだろうか。

「まあ、マカロニさんかアルスと一緒にいてくれたら大丈夫じゃね？」

「そうだけど……」

「とりあえず、自分達の心配だな。これから買い物いこうと思うんだが一緒にいこうぜ」

オレの誘いに

「そうね」

と、短い返事

銀貨1枚だして銅貨が3枚帰ってきたのでいま現在銀貨1枚銅貨5枚である

そういうわけで、買い物のために街を回ることになろうと思う。

☆☆☆

「はぁゝあ」

あくびがでる

「おい、まじめにしろよ」

門の反対側に立っている門番係りの上司のジェイドさんに注意される

「そんなこといったってですよー。暇なんですよ。こんなところるわけじゃないですか。例のヤツ」

例のヤツとは最近噂になっている全身鎧に包まれた鎧の剣士のことである。

聞く限りどんな攻撃も通用しないとか。

まあとりあえず不気味だからそんなヤツみつけたら報告しろだと。

「ガタガタうるせーな。門番つーのはそんなもんなんだよ。文句垂れるようじゃこの仕事はやってけねーぞ」

門番なんて立ってるだけで楽かと思ってたんだけど

立ってるだけってのも大変だなあ

はじまりの街（後書き）

和式っていいですね。

街でぶらぶら（前書き）

街の名前とか背景をそんなに書いてなかったんでいろいろ書いてみました。

街でぶらぶら

とりあえず街を探索することになった。

「うおー人が多いー。うお！」

となりでホタリンがなぜかハイテンションである。

っていうか、アレ？ あいつどこいった？

と、思ったら右側に見える店で

「おっちゃんそれ何円？ まじうまそー」

よだれが垂れそうなアホッ面で店員のおっちゃんとしやべってた。

……迷子になっても知らないんだから

「円？ 2つで銅1枚だぜ。まいど！」

「センキュー！ コロネ、うまそーだぜこれー」

私の心配なんか気にもとめてないような雰囲気でこっちに歩いてくる

まあ、当然といえば当然か……

「んー？ ふおーふいふあ？」

隣でホットドックみたいなヤツをくわえながら「んー？ どうした

？」と聴いてくる

っていうかなんでわかったわたし。

「いや、別に？ それにしても人が多すぎるわね……店も無駄に多いし。なにかイベントでもあるんじゃない？」

「ふぁー、あうほごー」（あー、なるほどー）

っていうか食べ終わってからしゃべりなさいよ！

「……ん……んあ、やっと食い終わった。はい」

そう言われて、さっきのホットドックっぽいのを貰う。

結構おいしい……

礼を言わないとね。別に嬉しかったとかじゃなくって、いやもちろんうれしかったけど礼儀としてね？

「あ、ありが……」

途中まで逝ったところで気づいた。あれ？

あたりを見回す。

どこいったアイツ！後で絶対叩く！

と、思ったらこんどは道の横についてあるベンチで暇そうにタバコにみえる棒をくわえながら新聞を読んでいるおじさんとしやべって

いた。

ったく、ちょっとはひとみしりしなさいよ

「あのさー、聞きたいんだけどさーおっさん」

「ああ？なんだいボーズ」

「今日なんか、イベントでもあんのか？」

あー、さっそく聞きたくなっただってわけね。

なにこの無駄な行動力。

「おいおい冗談だろうボーズ。あんた知らねえーってのかい？ 明日はここでこの前召喚された勇者様が出発するんだろうが。ほら、ここにもでかどかど書いてある」

そういうおじさんが新聞も持ち上げてホタリンに見せる。

なんか、貴重な情報そうだ。とりあえずホタリンの所へいこう。

「なんの話してんのよ！勝手にいなくなつて」

ベコッ

まあ最初から聞こえてたけど、めんどろなので途中から来ましたよ的な展開に持ち込む

「まーいいじゃんいいじゃん。てゆーかみてみろよこの記事。」

そこにはでかかど『二代目の勇者降臨!!!』と、書いてある。

なにになに……1か月前魔王を倒すために召喚された勇者様がついに
出発!ということでアルデート国で出発式があるもよう。

ここってアルデート国っていうのか。

「おっと、彼女かい? ボーズ。おじさんうらやましいぜ」

「ちょ、ちがいます! そんなじゃないですまだ!」

「まだ……ねえ」

ニヤリ……と笑うおじさん。あーなんか腹立ってきたー。殴って
いい? 殴っていいよね

「いや、落ち着けてまじ。こわいよ」

ホタリンに注意された。あれ? わたしって結構表にでちゃうタイ
プなのかな?

「まあー、おじさんいろいろ教えてくれてセンキューな!」

「元気でなー」

別れを告げて、ふたたびぶらぶら。

ってゆーかここほんとに広いわね……こいつ迷子にならないように
気をつけないと

……ってどこのお母さんよわたしは

それから何時間か歩いていたらギルドという文字が書かれた看板が立っている大きい木造建築を発見した（日本語でギルドとかかいていたわけじゃないけどなんとなくそう読めた。通訳機能でもついているのかもしれない）ので入ってみることにする。

中はちよつと、いや酒やら汗やらいろいろな臭いが混じっていて変わった臭いがした。

テーブルや椅子が並び武装したむさくるしい人たちがまっ昼間からお酒を飲んでいる。

文字通りギルドってことね。あのクエストとかうけられるような

とりあえずどーするのかホタリンにきいてみ……ようと思って横を見たらすでに彼は私の隣にはいなかった。

あーもう、うろちよろしすぎでしょ

「なあーお姉さんここってギルドでしょ？クエストとかうける的な」

……。

……敬語ぐらい使いなさいよ！

「はい、ここで未登録の方は登録して、すでにご登録しているお客様はむこう側にあるクエストボードに張ってある紙をこちらに持ってきてクエストを受託します。ご登録なさいますか？」

「うんするするー、こっちの人と一緒に」

「かしこまりました。ではこちらの紙にご記入ください」

そういい紙を渡されたので、二人して書く。

名前はー……ころね

得意武器か……なんだろう。一応ナイフってことで

出身地？どうしよう、わたし達アルデートかしらない。

「ねえ……出身地どうしたの？」

「ああ、適当で良いだろう。すんごい田舎で昔ほろびたとかいってけ」

うわー、テキトーすぎる。

まあ、いまのところそのてを使うしかない

そう思い、私はテキトーに思いついたアルゼンチンと書いた。

「あー、書けましたー。」

そう言うときさっきの女の人紙を受け取り……困った顔をする。

「あー、すいません。なんて読めばー……」

そこで私は気づいた。

文字は読めるけど書けない！

「いや、すいません私遠い国で育ったものでまだこちらの言葉は書けなくて……」

と、とっさに思いついた嘘をいい、女の人に言葉で伝えて書いてもらう。

ホタリンは隣で何やらゴソゴソしている。

ってというか紙白紙のままじゃん！

「ちょっと、何やってるのよ……！」

と、聞こえるか聞こえないかくらいの音量で聞く

「いいからいいから……よし」

何かの準備が整ったかのような返事をされる

「オレ、この前手をケガしちゃって……書けないんすわ。書いてもらえますー？」

そういうホタリンの右腕にはいつの間にか包帯が巻かれていた。

なるほど……

こういふときだけ無駄に頭がキレるところは素直に尊敬するわ

「かしこまりました。まずはギルドについての説明をさせてもらいます。ギルドにはF、E、D、C、B、A、S、SS、SSS、という段階に分かれています。いまはお客様が一番低いF級からのスタートになります。ランクが高ければ高いほど強いモンスターの討伐や入手困難な素材収集と難しくなりますが、報酬もそれに合わせて高く設定してもらっていますし、普段達いることのできない禁止区域にも入れるようになります。次に上げ方についての説明ですが、1つ上のランクを10回クリアできれば1つ上、2つ上のランクを5回クリアできれば1つ飛んで2つ上、3つ上を1回クリアすればさらに1つ飛んで3つ上のランクに上がることができます。どこかわからない場所などおありでしょうか？」

と、女の人が淡々と述べる。

別にわからない点は無かった。 きっとこの人の説明が上手いからだろうか。

隣を見る。

……。

「あ、ああ悪いやなに謝ってんだオレ。ん？あ、いや何でもないよ？別に。え？説明終わった？わかんないところは別になかったぜ？ほんとほんとありがとう！」

絶対寝てたな。

「そうですか。それでは説明は異常となります。では、私はこれで。」

そういい、カウンターの奥へ消えて逝った。

「あんた、寝てたでしょ？」

「ああ、ほんのちょっとな。ちよつとただだよ？ まじ。F級からスタートなんだろう？ 余裕余裕」

いやそこ始めのほうだし。

うん、こいつ始まってすぐ寝たな。

「はあ……わかんないところはわたしが宿で教えるから。いい？」

「ああ……なんかわるい」

なんか ってなんだろう。

あー、なんか日も暮れてきたな。夜ごはんもそろそろ運ばれてきそうだし帰るとするかなー

「そろそろ、暗くなったし、帰ろうぜー。あー腹へった」

「あんた昼あんだだけだべた上に間食もしてたじゃない。」

「そーゆーお年頃なのさッ」

はあー、まあいいや

そういえばコイツ何歳なんだろう。

性格的に16歳くらい？

とりあえず、わたしと同じ年齢という設定にし、勝手に納得する。

さてと、帰ろうか。

そう心の中で呟き、帰ることにした。

帰るときはちょうど夕日が沈み始めるところで、レンガ作りや木造の家がいい感じに赤く染まり、非常に綺麗だった。そういえばこの街って中世ヨーロッパみたいな感じだなあ。

あたりを見回す。

街の北側にはかなり大規模な城が立っている。大きさはというと東京ドーム1個分くらいあるんじゃないかと思う。まあ東京ドームなんて見たことないけどさ？

あー、なんか綺麗だな

なぜか懐かしさに似た感情が湧きあがってくる

「あー綺麗だな」

となりでホタリンが言う。ホタリンもわたしと同じところをかんがえていたらしい

「あの人」

うん、前言撤回。

バシッ

「いってえ何すんだよいきなり！」

「べ、別に？ ほら、もう宿見えてきたわよ」

「お、おう……」

頭をさすりながら返事をする。

改めてみるとこの宿屋、大きい。

それに今気づいたけど二階建てらしい。それに木製だ。煙突から煙が立っているのはあそこらへんに料理する厨房らしきものがあるからだろう。

昨日来たばかりだというのに、すでに自分の家のようになじんでいた。

その後夕飯を食べ、布団につく。

はあー、今日も疲れたし早めに寝よう。

ってことで早めにお風呂に入ってベッドでゴロゴロしていると

「お前もう寝るのか、まあ今日は結構動いたし、オレも眠たいんだけどね」

ほたりんもとなりのベッドに入る。

静寂

だが、いまのコロナにとってはそれが心地よかった。

「あー……」

起きあがる。

ねむれねえええええええええええええええええええええ

疲れたのに眠れないってよくあるよね え、ない？ あそう、すまん。

横をみる。

寝てやがる。まあ当然か

いつもなんかツンツンしてるけど、寝顔結構かわいいじゃん

さあーと、と

外にでる。

この宿屋にはめっちゃ広い！とまでは言わないが普通—よりは広い
 くらいの庭がある

んなどこでなにすんだよオイって？　ツチツチツチ　それは実験さ！

……誰にしゃべってるんだか

とりあえず結界魔法を発動させる。

この魔法は薄っぺらいけど硬い魔法でできた壁を作ることができる

それをどうにかして形をかえて腕を包むようにさせる。

そして地面を殴る。　てい！

痛くない！　っていうかなんか地面が割れてるし

次にグラビトンを発動する

重力が発生するのは目の前。それを結構の出力度合いでする

するとオレの体は吹っ飛ばされたように吸い寄せられる

やはりな……

ゲームの中じゃただの防御魔法としてしか役割は無かった。重力魔法だって相手の移動速度を少し下げることくらいしか使い道がなかったはずだ。こっちに来てから使い方の応用が利きやすくなってやらあ。

ということは……。

その後、いろいろやったら朝になった。

「ふむ、今後の戦闘が楽しみだ」

だがホタリンは眠くなるどころかテンションが上がっていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753y/>

暇な世界にさようなら

2011年11月26日01時52分発行